

令和元年度 文部科学省 道徳教育の抜本的改善・充実に係る支援事業  
令和元年度 静岡県教育委員会 道徳教育推進事業  
令和2年度 静岡県教育委員会 道徳教育研究協力校

# 研究紀要

夢をはぐくみ 夢に向かって力をつける子の育成

～多面的・多角的に考え、友達と共に未来を見つめる～



令和3年3月

伊東市立大池小学校

伊東市立旭小学校

伊東市立門野中学校



## はじめに

平成29年7月に告示された学習指導要領には、「特別の教科 道徳」の目標について「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」と示されています。この度、伊東市立大池小学校・旭小学校・門野中学校では、令和元年度・2年度の2年間にわたり、文部科学省の「道徳教育の抜本的改善・充実に係る支援事業」及び「静岡県教育委員会の静岡県道徳教育推進事業」の研究指定を受け、これからの道徳教育の在り方について研究を深める機会をいただきました。

しかしながら、令和元年度から続く新型コロナウイルス感染症の全国的な拡大の影響により、令和2年度の上記諸事業はすべて中止となりました。瞑々たる漆黒の闇の中から、かすかながら確かな光明が見え始めた矢先の中止決定は痛恨の極みではありましたが、門野中学校区研究指定校3校のすべての教職員のたゆまぬ探究心と子供への思い、道徳教育への深い情熱と理解から『夢をはぐくみ 夢に向かって力をつける子の育成～多面的・多角的に考え、友達と共に未来をみつめる～』の研究テーマのもと、研究を継続することといたしました。

わたしたちが道徳の授業で求めてきた子供像は「関わり合いの中で認め合い、互いに高め合うとともに積極的に活動する子」「夢や希望を持ち困難や失敗を乗り越えるたくましさを持った子」「生命の尊さを理解し、かけがえのない生命を尊重する子」です。

研究を推進するに当たり、道徳科の授業全般に関する研究を行う『授業研究部』、他教科とのつながりに関する研究を行う『教科等研究部』、行事や家庭・地域連携に関する研究を行う『連携研究部』の三つの研究部を組織しました。『授業研究部』では「考え議論する道徳への授業改善」、「認め励まし、よさを実感する振り返り」を中心に研究を進めました。『教科等研究部』では、「重点内容項目を意識した系統的な指導」、「他教科との関連を重視した教育課程」の研究に取り組みました。『連携研究部』では、「道徳的実践の場としての特別活動」、「校区内小中学校・地域との連携」について研究を深めました。これら三つの研究部が『校区連携カリキュラム』により相互に有機的に連携し合うことにより、道徳科の授業改善が図られ、全ての教育活動の場面で様々な道徳的価値が意識されるようになってきています。

相対性理論で有名な物理学者 Albert Einstein 氏の、『Education is what remains after one has forgotten everything they learned in school. (教育とは、学ばれたものが忘れ去られた時に残ったもののことである。)』の言葉通り、道徳科の授業を通して涵養される『道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度』等が、子供たちの生涯にわたってはたらく『生きる力』のひとつとなることを期待してやみません。

最後になりましたが、本校区の研究を進めるにあたり、御指導・御助言をいただきました秋田公立美術大学副学長・毛内嘉威様、創価大学教職大学院教授・石丸憲一様、鳴門教育大学副学長・理事・佐古秀一様、静岡県教育委員会義務教育課様、静岡教育事務所地域支援課様ならびに伊東市教育委員会教育指導課様をはじめ、保護者・地域の皆様に心より深く感謝申し上げます。

令和3年3月

伊東市立大池小学校長 井上 雅夫  
伊東市立旭小学校長 濱村 幸美  
伊東市立門野中学校長 齋藤 秀輝

# 研究紀要目次

夢をはぐくみ 夢に向かって力をつける子の育成  
～多面的・多角的に考え、友達と共に未来を見つめる～

<b>1 研究の概要</b>	<b>1 ~ 3</b>
(1) 門野中校区研究主題	
(2) 主題設定の理由	
(3) 研究の目的	
(4) 研究内容	
(5) 研究方法	
(6) 研究構想図	
<b>2 門野中校区小中連携カリキュラム</b>	<b>4 ~ 9</b>
(1) 縦の接続を意識した指導計画の作成	
(2) 門野中校区小中連携カリキュラムの研究過程	
(3) 連携カリキュラムを活用した道德教育の充実	
<b>3 授業研究 3校共通の取り組み</b>	<b>10 ~ 14</b>
<b>4 各校の実践</b>	
(1) 伊東市立大池小学校	<b>15 ~ 20</b>
(2) 伊東市立旭小学校	<b>21 ~ 26</b>
(3) 伊東市立門野中学校	<b>27 ~ 32</b>
<b>5 終わりに</b>	<b>33 ~ 35</b>
(1) 成果	
(2) 課題	

## 研究成果物・資料

- (1) 各校の道德教育全体計画
- (2) 重点内容項目に関する小中連携カリキュラム
- (3) 各校の道德教育全体計画別葉

## 1 研究の概要

### (1) 門野中校区研究主題

夢をはぐくみ 夢に向かって力をつける子の育成  
～多面的・多角的に考え、友達と共に未来を見つめる～

### (2) 主題設定の理由

門野中校区（大池小学校・旭小学校・門野中学校）は、全体的に素直で純朴な子供が多く、各学校において温かな関わり合いを大切にされた教育活動を継続して行っている。地区育成会等の活動も活発であり、学校と地域が一体となって子供を育てようとする土壌がある。しかし、一方では様々な生育歴・家庭環境等の背景をもつ子供も少なくなく、不登校児童生徒の増加や問題行動の増加などが課題となっており、校区3校の連携を深めながら、確かな子供理解に基づく親身な指導を継続して実施しているところである。

本研究を実施するにあたり、校区の子供の実態を考察したところ、以下のような実態が浮かび上がった。

- ・素直で、将来の夢や目標を持っている子供が多い。
- ・できるまで何かに取り組み、達成感を味わった経験のある子供が多い。
- ・協力して取り組むことに喜びを感じる子供が多い。
- ・自己肯定感の高さに学年間の差がある。
- ・学年が上がるにつれ、失敗を恐れない気持ちに低下傾向が見られる。

研究を開始するに当たり、3校の教員が一堂に会する3校合同研修や、各校の研究の推進役である研修主任の会合等で上記の実態を分析した結果、目標や夢に向かい、仲間と協力しながら努力する姿勢があるという良さがある一方、学年が上がるにつれ人間関係の問題に直面したり、努力してきたことが失敗してしまったりした時に、夢や目標をあきらめ、妥協してしまう傾向があるという結論に至った。

平成29年7月に告示された学習指導要領では、情報化やグローバル化など社会の変化の速度が著しく進展する時代の中、予測できない変化に主体的に向き合い、感性を豊かに働かせながら自らの可能性を発揮し、よりよい未来の創り手となるために必要な資質・能力を育むことの重要性が述べられている。また、資質・能力を育成するために、子供たち一人一人が課題意識を持ち、他者と協働しながら「主体的、対話的で深い学び」を推進することが求められている。子供たちには無限の可能性があり、失敗や躓きも夢の実現の過程である。また、失敗と捉えられることも見方を変えれば成功となることもあれば、新たな成長のきっかけとなることも多い。予測の難しい未来、どのような状況に置かれても夢や目標を持ち続け、他者との協働の中で自分にとってより良い生き方を追究する姿勢を育てることが、子供たちの生きる力につながると考えた。

以上のことから、門野中校区では子供の「夢をはぐくむこと」に焦点を当て、「子供たちの夢を育むために必要なことは何か」を模索しながら、これまでの各校の教育活動、3校の連携、地域との連携等の在り方を再考し、「特別の教科 道徳」の授業を要とした道徳教育の充実に関する研究を推進することとした。

### (3) 研究の目的

門野中校区（大池小学校・旭小学校・門野中学校）において、地域と連携して育てる子供像・道徳教育における重点内容項目を設定し、「特別の教科 道徳」の授業を要とした道徳教育の充実を図る。

#### 【校区小中学校・地域が連携して育てる門野の子】

- ・夢や目標をもち困難や失敗を乗り越えるたくましさをもった子
- ・関わり合いの中で認め合い、互いに高め合うとともに積極的に活動する子
- ・生命の尊さを理解し、かけがえのない生命を尊重する子

#### 【門野中学校区道徳教育 3校共通重点内容項目】

- 【A 主として自分自身に関すること】  
希望と勇気・努力と強い意志（小）・克己と強い意志（中）
- 【B 主として人との関わりに関すること】  
相互理解、寛容

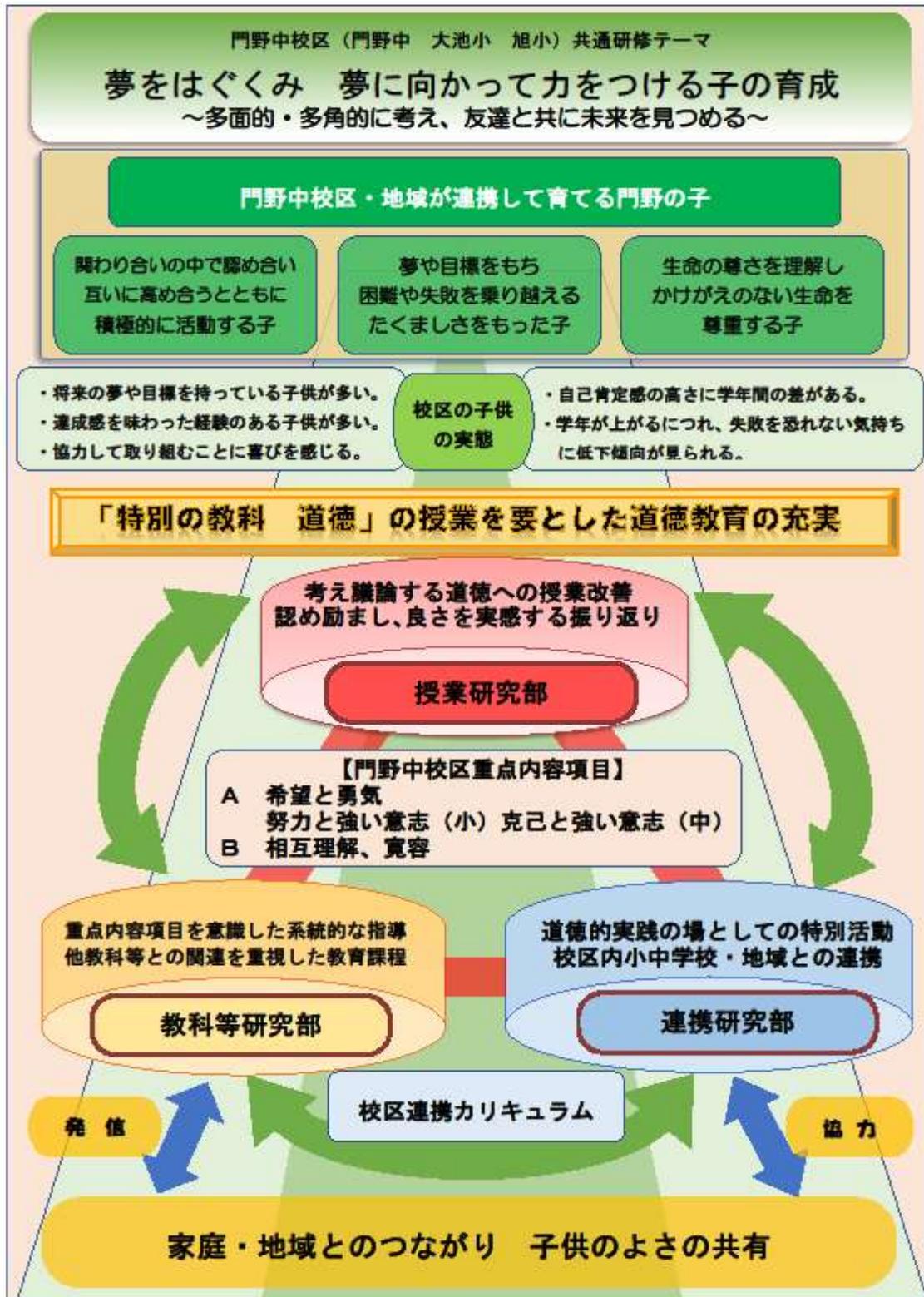
### (4) 研究内容

- ア 道徳教育重点内容項目を意識した、小中9年間の継続した指導の在り方及び、他教科等との関連を重視した校区連携カリキュラムを作成する。
- イ 道徳教育の要となる「特別の教科 道徳」において、考え議論する道徳への授業改善を図るとともに、子供が自分のよさを実感する振り返りの在り方を研究する。
- ウ 道徳的実践の場である特別活動及び、校区小中学校、地域とのより良い連携の在り方を研究する。

### (5) 研究方法

- ア 以下の三つの研究部を組織し、以下の内容について研究を推進する。
  - (ア) 授業研究部
    - a 考え議論する道徳への授業改善
    - b 認め励まし、良さを実感する振り返り
  - (イ) 教科等研究部
    - a 校区の重点内容項目を意識した系統的な指導
    - b 他教科等との関連を意識した教育課程
  - (ウ) 連携研究部
    - a 道徳的実践の場としての特別活動
    - b 校区内小中学校・地域との連携
- イ 3校校長、教頭、教務主任、研修主任、各部担当者をメンバーとした「門野中校区道徳教育推進事業企画委員会」を定期的で開催し、伊東市教育委員会、静岡県教育委員会静岡教育事務所地域支援課等の指導を仰ぎながら、ミドルリーダーの企画力・実践力を生かした研究を推進する。

(6) 研究構想図



## 2 門野中校区小中連携カリキュラム

共有した「目指す子供の姿」の具現化を目指し、校区全体の教育活動がより効果的に機能するように小中連携カリキュラムを作成した。各校で行われている教育活動を見つめ直し、家庭・地域との連携も視野に入れながら、道徳教育との関連付けを明らかにした。

校区3校の全職員による、子供の発達段階に応じた道徳性の育成に主眼を置いた教育活動の展開を目指した。

### (1) 縦の接続を意識した指導計画の作成

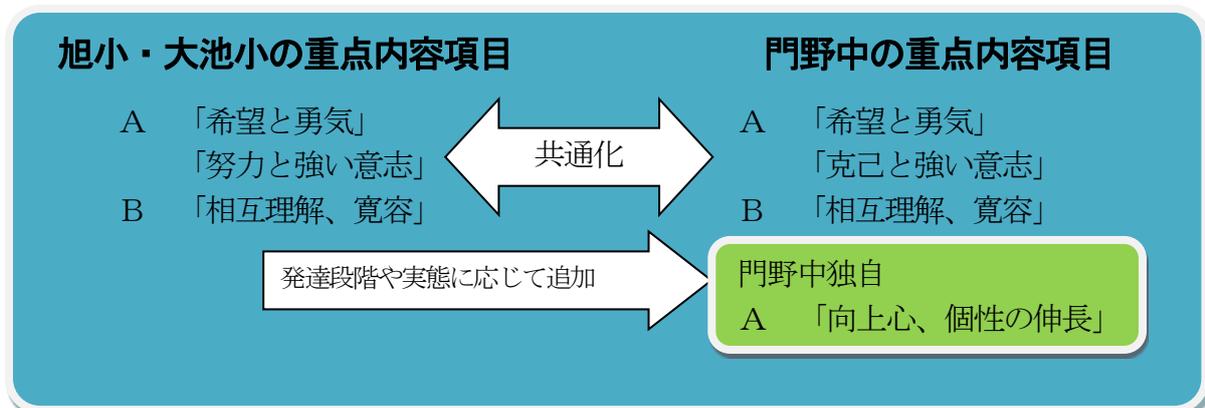
学校における道徳教育は、子供の発達段階を踏まえて行われなければならない。「中学校学習指導要領解説特別の教科道徳編（平成29年）」には指導の配慮事項として、「小・中学校間の接続を意識した取組も大切である。（中略）小・中・高等学校の接続を意識して道徳教育の指導の改善を一層図っていくことも考えられる。」とある。そこで、校区3校が目標を共有することで、縦の接続を意識した連携カリキュラムの作成が可能となり、より一層、児童生徒の道徳性の育成にこだわった教育活動が展開できると考えた。

### (2) 門野中校区小中連携カリキュラムの研究過程

これまで、道徳教育において重点的に指導する内容項目を、実態に合わせ各学校で設定していた。連携カリキュラムの作成にあたっては、各校の子供の実態を話し合い、小中9年間で育てたい目指す子供の姿を共有した。合わせて、目指す姿に迫るために必要な重点内容項目を検討、共有することで小中学校の連携のあり方を明確にした。縦の接続を意識した道徳教育を目指し、3校で協議を重ねながら道徳教育全体計画や別葉、年間指導計画を作成した。

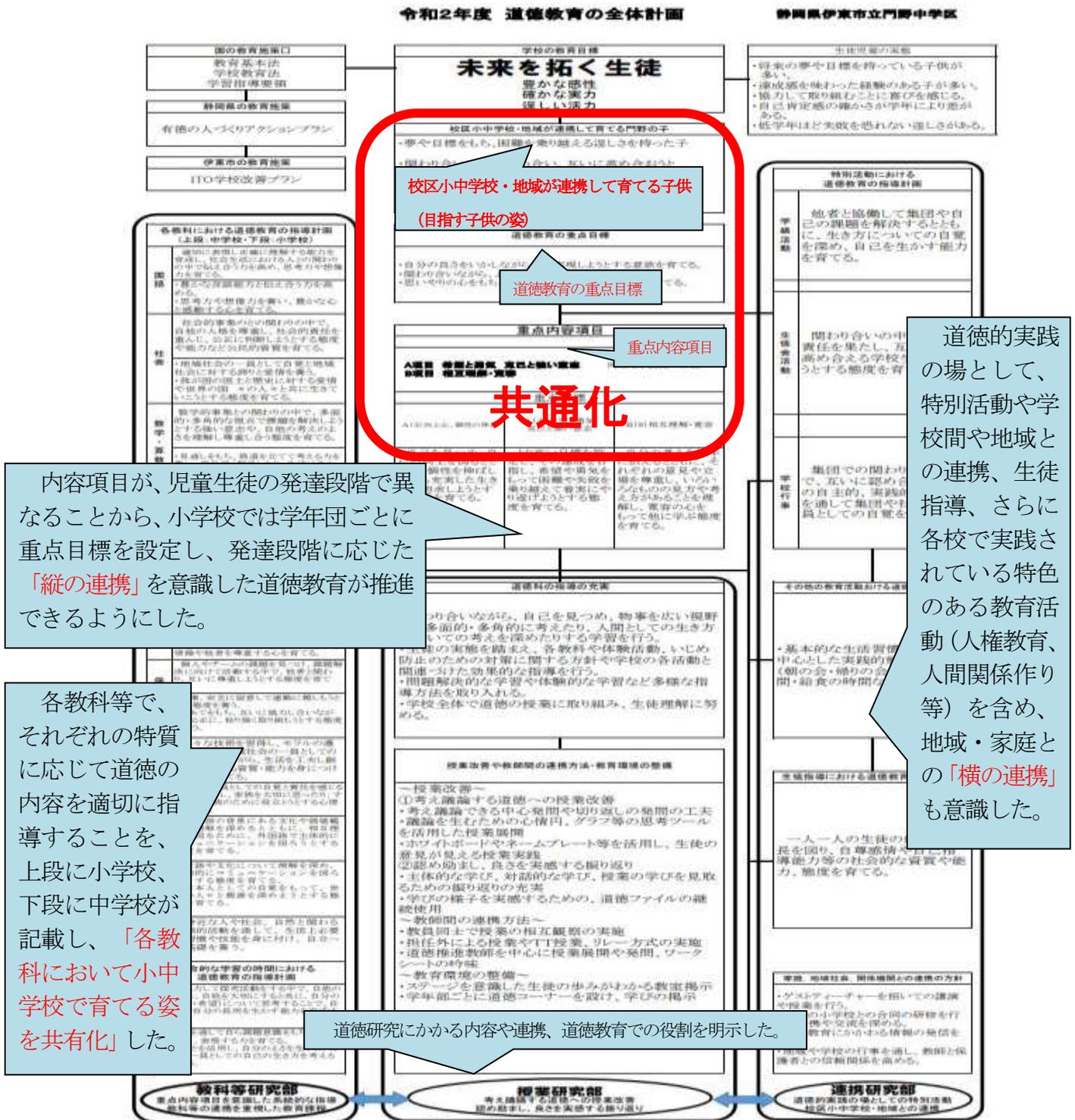
#### ア 目指す子供の姿と重点内容項目の策定

令和元年度当初は、研究初年度ということもあり、校区で育てたい子供の姿が不明確で、重点内容項目も広く5項目が設定されていた。そこで、各校の教育目標や子供の実態について検討を重ね、9年間を通して育てたい目指す子供の姿を共有した。さらに、3校共通の研究テーマについても吟味を重ね、共通の重点内容項目を「希望と勇気」、「努力と強い意志（小）」、「克己と強い意志（中）」、「相互理解、寛容」とし、合わせて子供の発達段階やそれぞれの学校の実態に応じ、各校独自の重点内容項目を追加することにした。



## イ 道徳教育全体計画の改訂

目指す子供の姿と重点内容項目を校区で共有したことに伴い、令和2年度はそれまで各校が独自に作成していた道徳教育全体計画を校区共通形式とした。校区全体で目指す子供の姿が明確となり、校区の道徳教育の全体像が明確になった。



共通化した道徳教育全体計画 (例：令和2年度門野中学校)

## ウ 別葉の改訂

別葉も校区共通の形式へと見直しを図った。形式は横にステージと月別で示し、時系列で重点内容項目と学校の教育活動全体との関連を明らかにした。

共通化した別葉（例：門野中学校1年生）

## エ 校区重点内容項目に焦点化した連携カリキュラムの作成

校区で共有した目指す子供の姿に迫るため、重点内容項目に焦点化した校区連携カリキュラムを作成した。各校が作成した別葉を重点内容項目別に統合し、9年間で行われる学校の教育活動全体との関連が一覧できるようにし、校区で連携しながら連続した道德教育の充実を目指した。

校区重点内容項目に焦点化した連携カリキュラム（例：希望と勇気、努力と強い意志）

### (3) 連携カリキュラムを活用した道徳教育の充実

校区で共有した道徳教育全体計画、別葉、連携カリキュラムの活用・改善を図り、より充実した道徳教育が実践されるよう取り組んだ。

#### ア 道徳教育全体計画別葉の活用

令和元年度に作成した別葉を基に実践を行いながら、より道徳教育が充実するように随時見直しを行った。拡大した別葉を職員室に掲示し、変更点や改善を要することを朱書きし、次年度の計画に反映できるように記録している。また別葉は、学年や教科、特別活動等の各部会での話し合いを経て、各領域の教員が入力している。これらより、全ての教育活動について、道徳教育上の視点から教育活動の見直しが図られ、指導に携わる教員の道徳教育に対する意識も向上した。令和2年度は新型コロナウイルス対策による臨時休業から始まったが、別葉の作成に多くの教員が携わっているため、教育計画の変更に対応するための別葉の修正作業も、全体の共通理解の下、柔軟に行うことができた。



別葉の見直し



見直された別葉

#### イ 「特別の教科 道徳」の年間指導計画の作成と活用

道徳科の指導が、道徳教育全体計画に基づき、各教科等の年間指導計画と関連させながら、計画的、発展的に行われるように年間指導計画を作成した。道徳科の授業が充実した道徳教育の要になるように見直しと改善を重ねた。

令和2年度 特別の教科道徳 年間指導計画(2年)

時期	回	主題名 教材名 内容項目	ねらい	主に育てたい 道徳性の諸 相	評価の視点	他教科等との関連
4月	1	ガイダンス	○これから一年間学習する道徳についての説明を聞き、これから学習する道徳について、自分の考えをまとめ、自分の生活を振り返ろうとしている。		教材を通して、道徳的価値について、考え議論しながら、自分の考えをまとめ、自分の生活を振り返ろうとしている。	
	2	【高野な関係を育む】 1 あいさつ	な言葉づかいや行動をとろうとする意欲や態度を育てる。	態度		・表彰集会 ・終業式 ・修了式
	3	【仲間を合わせて】 B 嵐嵐で学んだこと B(2)相互理解、寛容	○「みんながって、みんないい。」という言葉の意味を考えることを通して、異なる個性や立場を尊重し、寛容の心を持って相手の生き方に謙虚に学ぼうとする態度を育てる。	態度	自分の考えを相手に伝えるとともに、互いの持つ異なる個性や立場を理解して、認め合い、相手のよきから学ぼうとする謙虚さが大切であることについて、自分の見方・考え方を広げ、深めている。	・総合的な学習の時間(鎌倉市社会見学に向けて)「現地での探究活動」…班別研修を行うため ・下校パトロール ・国語「おたまじやくしたち四五匹」 ・音楽一般「パートの役割を理解し、表現を工夫しよう」④『業の世界を』
	4	【いじめのない世界へ(1)】 4 私のせいじゃない	○「私のせいじゃない」に描かれている泣いている子の立場に立っていじめの問題について考え、だれに対しても公平に接し、差別や	心情	泣いている子から見ると傍観者もいじめに加わっているように見えることに気づき、いじめの問題を自分のこととして捉え、考えさせている。	

項目は、「時期」、「主題名と教材名」、「ねらいと主に育てたい道徳性の諸様相」及び「評価の視点」と「他教科等との関連」とし、あえて中心発問や展開等を記載しないことで、児童生徒の実態に柔軟に対応できるようにした。

道徳科の年間指導計画 (門野中学校2年生より抜粋)



## エ 地域・保護者との連携の実践

目指す子供の姿に向けた取り組みを地域・保護者に伝え、連携して実践するために、おたよりや学校ホームページでの広報活動、授業参観での道徳科の公開、親子講演会を行った。

### (ア) おたよりや学校ホームページでの広報活動

学校ホームページでは、保護者に対して「その行事をどのような道徳的価値を意識して実践したかが分かること」、「その価値に対して、子供たちにどのような表れがあったかが分かること」を意図して3校で形式を揃え、各校の実践を紹介した。

また、学校だよりや学年だよりなどのおたよりを用い、道徳教育を意識した学校の取組や、子供の表れをタイムリーに保護者に伝えるよう努めた。



学校ホームページ (旭小学校)



学年だよりの例 (大池小学校)

### (イ) 授業参観での道徳科の公開

令和元年度には、道徳科の授業を1年間に1回は参観会で公開した。さらに、懇談会で授業のねらいや子供の表れについて話題にし、保護者と子供のよさを共有する機会を設けた。

### (ウ) 道徳講演会の実施

親子で道徳的価値について考える機会とすることをねらい、令和元年度には各校でPTAと連携し、講演会を実践した。多くの保護者が参加し、親子で道徳的な価値についてや、子供との接し方を考えたりするよい機会となった。

大池小学校	絵本による命の授業 ~『くまのこうちようせんせい』『かあさんのこもりうた』より~ 講師 絵本作家 このひとみ 氏・ピアニスト 吉川正夫 氏
旭小学校	夢に近づく『ほめ達!』コミュニケーション 講師 一般財団法人日本ほめる達人協会認定講師 鈴木敦士 氏
門野中学校	ペップトーク ~心を励ます言葉がけ~ 講師 一般財団法人日本ペップトーク普及協会代表理事 岩崎由純 氏



大池小学校での講演会のようすと、子供・保護者の感想等

### 3 授業研究 3校共通の取り組み

令和元年8月に実施した3校合同研修にて、3校の教員が一堂に会し、各校の道徳科の授業について以下のような課題を共有した。

- ・教材の内容やあらすじを確認することに終始したり、違う価値についての意見が多くなったりするなど、授業で扱う価値についての深まりが見られない。教師から価値について説明する場面がよく見られる。
- ・授業中の発言が一部の子供に限られ、多くの子供が考えを表現したり、自身の変容を実感したりすることができない。
- ・道徳の授業について、指導案を書いたり、授業を参観したりする機会が少なく、指導について自信がない教員が多い。
- ・特別の教科となり、評価を行うことになったが、子供一人一人を適切に評価することに不安がある。

上記の課題を受け、道徳的価値に関する多面的・多角的な思考を促し、友達との議論を通して道徳的価値への理解を深め、自他の良さを実感できるような授業を積み重ねることを目指し、授業研究に取り組むこととした。

研究を進めるにあたり、3校共通で取り組むことを確認し、各校の実態に応じて実践を重ねることとした。



令和元年8月 3校合同研修 道徳科の授業の課題と改善について検討

## (1) 考え議論する道徳への授業改善

### ア 3つの観と教育活動全体とのつながりの重視

授業で扱う道徳的価値を明確にし、子供の実態に合わせた授業を構想するために、教材研究の視点として「価値観」「子供観」「教材観」の3つの観を設定する。

また、指導案を作成する際に、道徳科の授業で扱う内容項目と関連する教育活動についても記載する。

門野中学校道徳科指導案		指導者
1 学級	3年1組 (男子13名 女子18名 合計31名)	
2 主題名	「ちがいを知ったその先に」(内容項目) B (9) 相互理解、寛容	
3 教材名	「しあわせ」 出典『新しい道徳3』(東京書籍)	
4 指導観		
ねらいとする価値	B (9) 相互理解、寛容	
価値観	学習指導要領では、自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなもの見方や考え方が存在することを理解し、寛容の心をもって謙虚に他に学び、自らを高めていくことと明記してある。 自分とは異なる意見に出会ったとき、葛藤や摩擦が生じて円滑なコミュニケーションが取れない場合がある。そのような場面に遭遇したとき、自分本位の視点からだけでなく、人それぞれのもの見方や考え方に違いがあることを理解し、受容しながら自分の考えに反映させたり自分の考えを深めたりする態度を育てていきたい。	
生徒観	よさ	普段から集団で活動する際は、困っている人を気にかけて、快く手を差し伸べたりすることができる。特に学校行事においては、不登校傾向の級友を気遣い、彼らの繊細な思いを受けとめたことで全員が一丸となって取り組むことができた。
	課題	個人に目を向けると、授業中の話し合い活動や道徳の議論する場において、他者の意見に耳を傾けるものごとにかく、最後まで自分の意見を押し通す姿が見られる。また相手の立場にたって物事を考えて行動しなければならぬと頭でわかっていても、なかなか行動に移せない生徒もいる。
教材観	主人公のタマゴマンが、好きな食べ物についての友だちとの会話やクラス全体の幸福についての話合いから、一人一人の考え方に違いがあることに気づく。また先生の「みんなの考え方のちがいを知ることが、全体のしあわせを考えるスタート」という発言に着目することで、異なる意見に触れたときに、それらを認め尊重することが、自分の考えを深めることにつながるということを実感できる教材である。	
中心発問	「考え方が違うからみんなが幸せになることはない」本当にそうだろうか。 育てたいのは… 判断力 ・ 心情 ・ 意欲と態度	
5 各教科や領域等との関連		
他教科	道徳科 (相互理解、寛容)	領域等
7月 国語科「世界に届ける言葉」	7月言葉の向こうに	6月負のスパイラルを断ち切ろう (コロナに対する差別)
11月 保健体育科「感染症」	11月しあわせ	9月門中祭体育の部 10月門中祭文化の部 12月人間関係づくりプログラム 保健指導 (性の多様性)
2月 英語科「Mother Teresa」	2月心にしみこむ「言葉」の力	2月保健指導 (心の健康)

指導案に掲載した3つの観と関連する教育活動 ( 門野中学校の例 )

## イ ワークシートの工夫

道徳科の授業において、一人一人の子供が考えをもち、自分ごととして問いに向き合うこと、友達の多様な考えに触れ、自分の考えの変容を振り返ることを継続して行う手だてとして、ワークシートを活用する。

### (ア) ワークシートの色分け

授業で扱う内容項目について教師も子供も意識し、内容項目ごとに授業の積み重ねや変容を確認することができるよう、ワークシートの色分けを行う。

A 主として自分自身に関すること	桃色
B 主として人との関わりに関すること	黄色
C 主として集団や社会との関わりに関すること	水色
D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること	黄緑色

### (イ) 振り返りの観点の統一

子供の9年間の学びの継続を意識し、振り返りの内容を下記のとおり3校で統一する。なお、振り返りの文言は発達段階に応じて検討した。

- |                                       |
|---------------------------------------|
| a 自分の考えをもつことができたか（4段階評価）              |
| b 友達の考えを聴いて、自分の考えを深めたり広げたりできたか（4段階評価） |
| c 今日の授業で感じたことや分かったこと（自由記述）            |



ワークシートを活用し自分の考えをもつ



授業の終末部に振り返りの時間を確保

## ウ 中心発問の明確化

授業の中で、子供が何について考え、話し合うのかを明確にするために、発問を吟味し、中心問を黄色の線で囲む。

## エ ネームプレートの活用

子供たち一人一人がそれぞれの考えを表示するための手立てとして、ネームプレートを活用する。



授業の板書の一例（門野中）

## オ 授業の相互参観

授業力の向上を図るため、校内で相互に授業を参観し合う体制を作る。



授業の相互参観（大池小）



授業後のミーティング（旭小）

また、各校の研究授業に相互に参加し、子供の発達段階について理解を深めたり、各校の研究を参考にし合ったりできるようにする。

本校区ではこれまでも3校で連携して教育活動を推進するため「3校合同研修」を実施し、職員間の交流を深めながら授業改善や生徒理解について研修を重ねてきている。本研究を実施するにあたり、「3校合同研修」で道徳の授業公開や事後研修、静岡県教育委員会静東教育事務所指導主事や大学教授など専門性の高い講師による講義を実施し、校区全体の道徳教育の向上を図る機会とする。

(令和元年度に実施された3校合同研修会の様子)



創価大学教職大学院 石丸憲一教授



秋田公立美術大学 毛内嘉威副学長



静岡県教育委員会静東教育事務所地域支援課 指導主事を招いての講義・演習

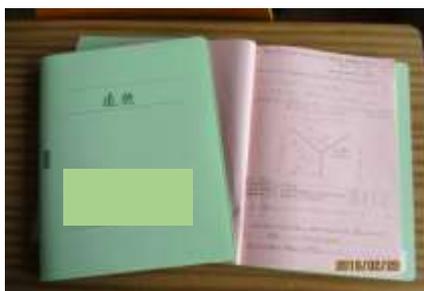


## (2) 認め励まし、よさを実感する振り返り

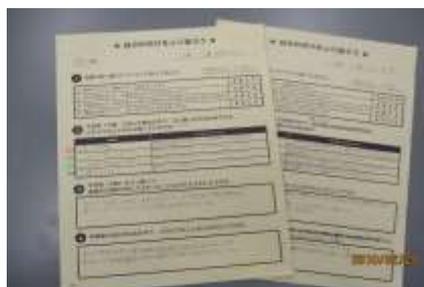
### ア 道徳ファイルの作成と活用

特別の教科 道徳の授業で扱ったワークシートや資料などを「道徳ファイル」にファイリングする。また「道徳ファイル」は次学年（※小学6年生は中学1年生へ）引き継ぎ、子供が自身の変容を確かめたり、教師が子供理解を深めたりするために活用する。

また、学期末や年度末には蓄積したワークシートを整理し、道徳科の授業で考えたことを振り返り、自身の変容について考える時間を確保する。



道徳ファイル（門野中）



道徳科の授業の振り返り（門野中）

### イ 評価に関する研修

#### (ア) 相互参観による評価の研修

各校の研究授業や相互参観の際、子供の発言やワークシートの記述などをもとに、子供の変容をどのように見とるかについて協議を行う。

#### (イ) 特別の教科 道徳の評価に関する研修

通知表の作成などに際し、道徳ファイル等の蓄積や授業の記録から子供の変容を見とり、子供が自分の成長を実感したり、保護者との連携を深めたりする評価について各校で研修を行う。



授業記録を活用した事後研修



評価に関する研修（門野中）





(イ) 研究の手立て

a 道徳教育授業研究サイクルの展開

日常の授業を日々改善し続けることができる研究体制の土壌づくりをした。道徳教育の研究を進めていく上で、道徳科の授業のみならず、日常の授業へ日々還元できる、教員の相互研鑽の場が保障されていることが重要と考えた。そこで、前年度まで校内で行われていた「校内出張」と呼ばれる仕組みを発展させ、道徳教育授業研究サイクルを開発し、実践をすることとした(図2)。

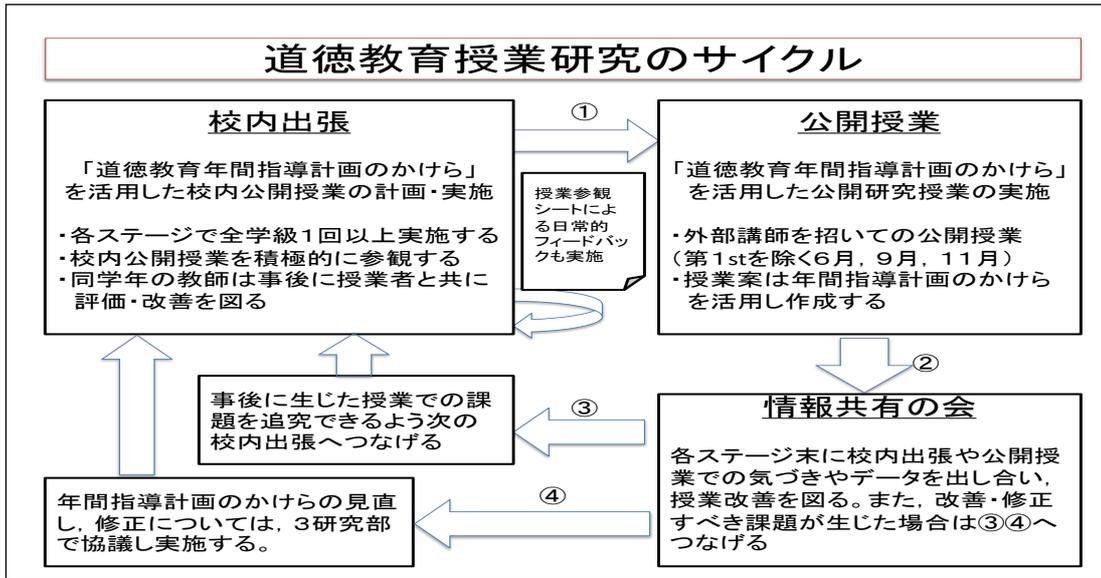


図2 道徳教育授業研究サイクルのイメージ図

b 道徳教育の年間指導計画のかけらを活用した授業作り

本校では、道徳教育の全体計画やその別葉は存在するものの、内容が網羅的であった。また、道徳科の年間指導計画は別葉とほぼ同じ形式であったため、使い勝手が悪く、活用しにくいという課題があった。そこで、各学年で「年間指導計画のかけら」と呼ばれる簡便なシートを作成し、授業作りに活用することとした(図3)。

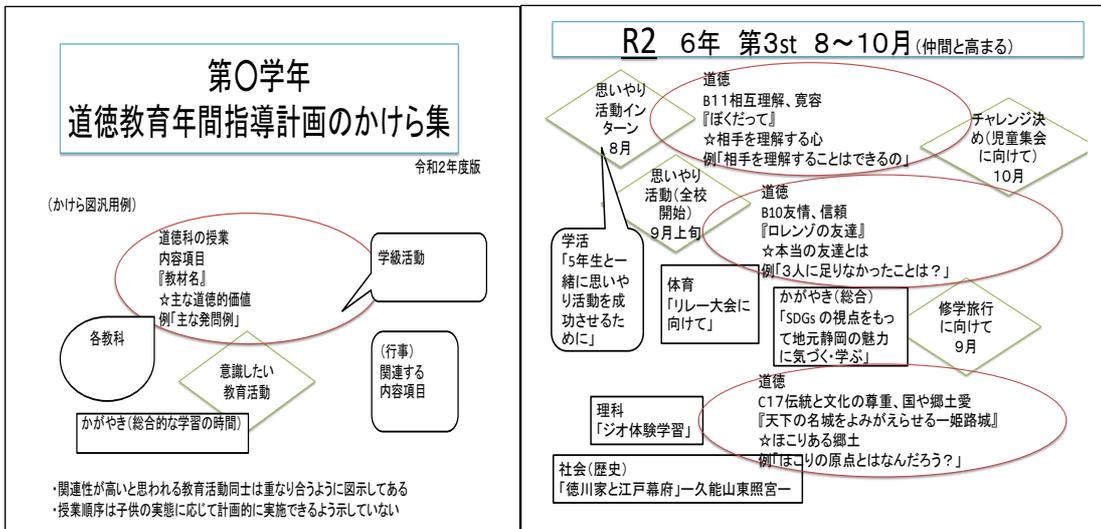


図3 道徳教育年間指導計画のかけらの汎用例図(左)と、かけらの一例(右)

c 道徳的価値について議論し、考えを深める授業の工夫

前年度までの道徳科の授業作りの反省の中で、「教師が道徳的価値を教えるのではなく、子供が価値について考える」ことが大切であり、難しくもあることが挙げられていた。そこで、道徳科の授業を構想するに当たり、子供に何を考えさせたいのかを明確にすると共に、子供の実態と教材の特質を押さえた発問の工夫や、考えを深められるようにするための問い返しに絞っていくことにした(図4)。

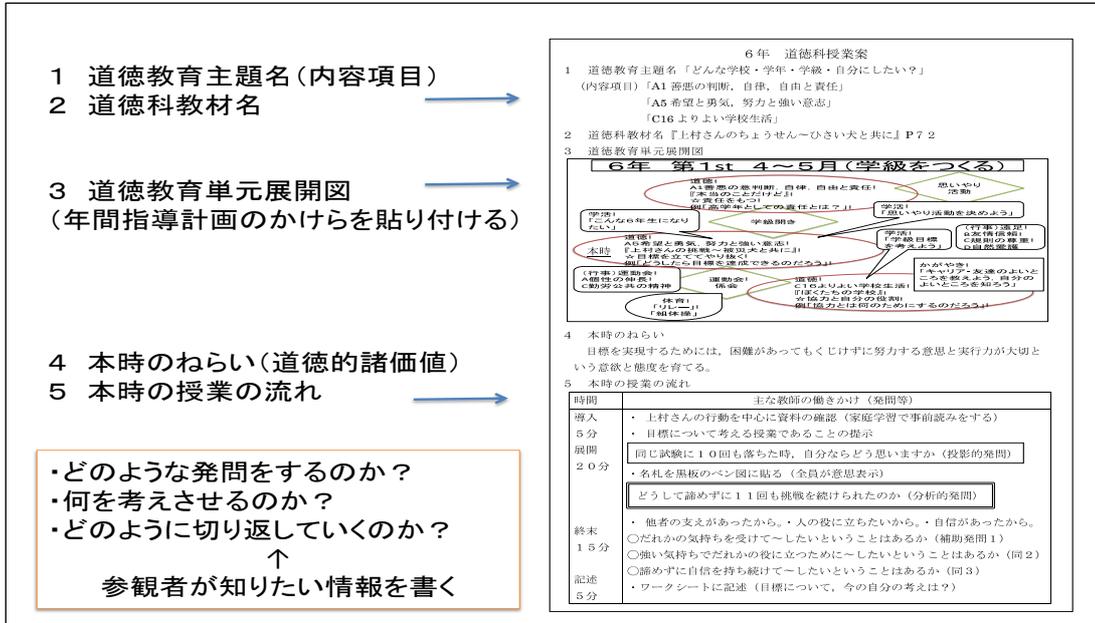
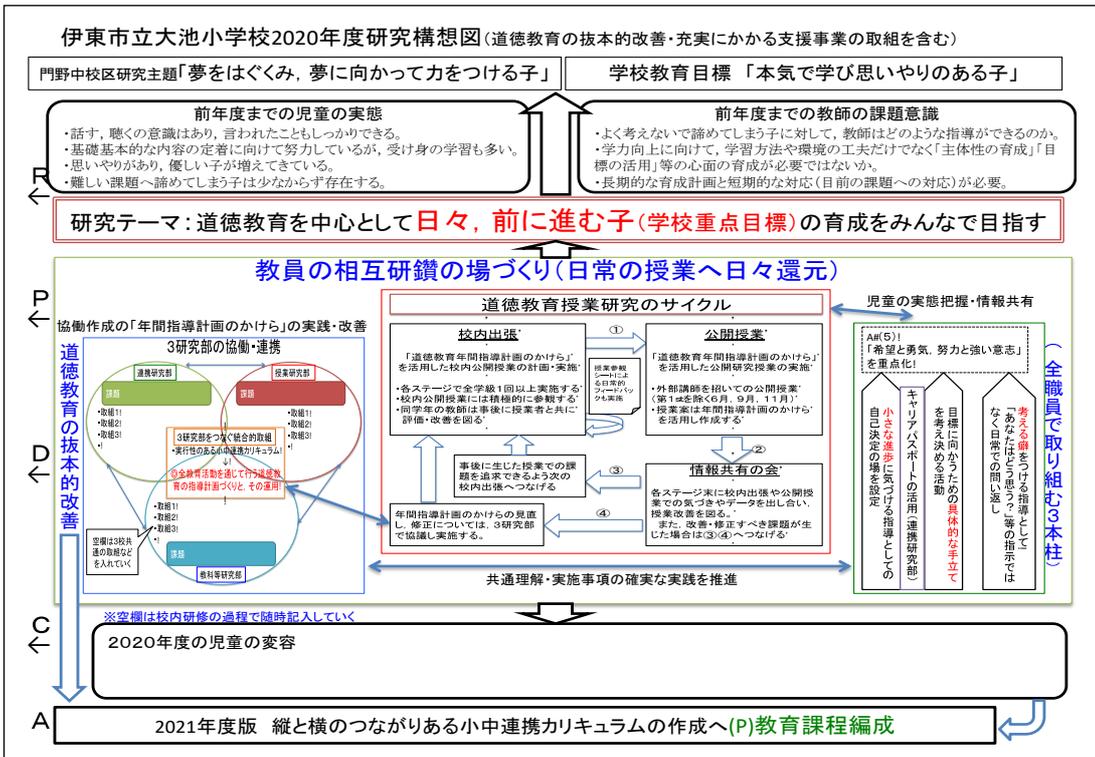


図4 道徳科の授業路案のコンセプトイメージ図

ウ 研究構想図

上記を踏まえ、以下の通り本校の研究構想図を作成した。



## エ 研究実践

### (ア) 道徳教育授業研究サイクルに関する実践

道徳教育授業研究サイクルとは、学校内の現状をリサーチした上で [R期]、効果的な計画を立て [P期]、日常的に授業を公開しながら [D期]、事後に評価と修正を図り、年間を通して日常の授業を改善していく [C・A期]、RPDCAサイクルを指している。

#### [R：リサーチ期]

まずは、互いの日常の授業や教育環境、子供の姿等を見合い、本校の現状を全職員が知るというコンセプトの「校内出張」（自分の学校に出張し、授業を参観するイメージから生まれた名称）を常時実施した。令和2年度には、特に同じ学年内の道徳科の授業を参観しやすいよう、時間割を組む工夫も加えた。

また、道徳科の授業を公開する際、授業参観シート（図5）を事前に配布し、活用することにした。その後の情報共有の場において、視点を絞って短時間で協議ができ、参観者の意見が授業者に還元されやすくなる効果をねらった（図6）。

授業参観シート

考え議論する道徳とは

前提について

手段について

目的について

授業者より

図5 授業参観シート

R2 提案授業事後研修のコメントから見える具体的な視点

考え議論する道徳とは

前提について

手段について

目的について

授業者からの参観の……

図6 事後研修後の課題の活用例

### (イ) 道徳教育の年間指導計画のかけらを活用した授業づくりに関する実践

#### [P：プラン期～教育計画作り～]

道徳教育の年間指導計画をより実効性のあるものにしていくためには、全教育活動の中で全職員が同じベクトルで道徳教育を行う意識と、それを支える全体計画との効果的な連動が不可欠と考えた。そこで、令和元年度には外部講師を招き、道徳教育を意識した令和2年度の学校全体の年間教育計画の作成についてのワークショップ研修を実施した（図7）。

鳴門教育大学副学長・理事 佐古秀一先生

チームで取り組むために必要なものは？

子どもの実態から始めよう

1 チーム（連）で取り組むために必要なもの

全体情報 学校全体の方向性、（踊りのフォーメーション） +信頼

場面情報 隣の人の情報（周りを見て自分の動きを調整）

2 学校全体の方向性（目指す子どもの姿）は、子どもの実態に合ったものでないと効果がない

これがカリマネではない

目標（目指すところ）→全体情報

教科横断的なもの（別業等）をPDCAで回す

組織構造（校内研修等） 組織文化（学年・学級等） その他（家庭や地域等）

目指すところに向かって学校教育全体をマネジメントしていくことがカリマネ。道徳教育の考え方も同様とも言える

田村知子カリマネ分析シート参考

図7 ワークショップ研修の様子（左）と研修の要旨（右）

[P：プラン期～年間指導計画のかけら作り～]

学校全体で目指す方向性や年間のステージが決まった後、効果的に道徳教育を展開して行くために、ステージごとに図式化された年間指導計画を作成した。シンプルに作成した結果、見やすく活用しやすいものになったが、全ての授業内容を網羅しているものではないため、名称を「年間指導計画のかけら」とした(図3)。他教科授業や行事等の教育活動と道徳科がどのように関わり合っているのかを、全職員で考えることができた(図8)。



図8 作成時の様子

(ウ) 道徳的価値について議論し、考えを深める授業の実践

[D：授業実践期～令和元年度～]

令和元年度までの授業実践の中では、授業者が価値を明確にしようとした授業を計画していても、子供たちが、価値の片面的な見方に留まり、深く考え進めることが難しい場面が多々見られた。そこで、価値に向かうための発問の精選に加え、より価値を深めて行くための問い返し(補助発問)の効果を確認した(図9)。また、次年度以降の授業改善についての基本的な考え方についても共通理解を図り、授業力向上のための研究体制や、時間を生み出す必要性について再確認することができた(図10)。

<p>教師の問い返し(補助発問)の効果について</p> <p>教師の問い返し(補助発問)の効果について</p> <p>「お母さんはどう答えるべきでしょうか」という発問で自分ごととして捉えて考えることができるのか?」          「生命の大切さを考えるのではなく、飼育、観音の信仰行動を問うような発問ではないだろうか?」</p> <p>問い返しの発問づくり          【数理解の言語のねらい】          生命を大切にすることの大切さ</p> <p>授業者は「価値のねらい」に自らを移動させる子が増え、いきなり「観音のねらい」や「観音のねらい」が、命を大切にすることだと考えを深め始めるようになった。</p> <p>「しかし、「生き物を大切にすること」ということは、そういうことなので、ここで観音のねらい「問い返し」が必要になると思います。」</p> <p>授業者：価値を明確化</p> <p>授業者：浅い価値で留まっている子供の状況をどうとらえ</p> <p>授業者：価値を深めていくためのゆさぶりをかける</p> <p>(事前に準備できたらゆさぶりをかけやすい)</p>	<p>③授業研究に対する考えと取り組み</p> <p>道徳科の授業改善についての基本的な考え方・提案</p> <p>教師の授業研究体制</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>特別な日の授業改善ではなく、<b>日々の授業を改善</b>することが目的</li> <li><b>お互いに日々の授業を観合う</b>ことが授業改善のはじめの一步</li> <li>観合った後は、<b>教員同士で語り合う</b>ことで、改善を図る</li> </ul> <p>授業を気軽に公開できる体制にするためには、指導案をより簡便かつ活用しやすいものへ変えていく必要がある</p> <p><b>授業力向上のための時間を生み出す必要性</b></p> <p>道徳科授業の捉え</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>児童の実態を踏まえ、本時の授業のねらい、<b>道徳的価値を明確</b>にしておく</li> <li>道徳教育の中の道徳科の授業という位置付けで、<b>全教育活動を通して道徳性を養う</b>(道徳科単体で考えない)</li> </ul>
--	---

図9 問い返しに関する事後研修の一例

図10 授業改善の基本的な考え方

[D：授業実践期～令和2年度～]

令和2年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、6月から授業を開始し、「年間指導計画のかけら」の内容を各学年で調整しながら授業を進めた。校内出張や研究授業に関しては、教室の人数が増え過ぎないように、分散的に実施をしたり、ICT機器を活用し、リモート参観をしたりする等の方法で行った。

授業中に向かい合っている発言や、グループでの話し合い活動等ができず、難しい状況であったが、子供たちは自分の考えをホワイトボードにまとめ、それを共有し合うことで、他者の多様な考えに触れることができた。授業では前年度からの課題であった「価値についての教師の問い返し」を精選し、子供たちの振り返りから、さまざまな立場に立って考えていることや、過去の学習で学んだことを生かして発言するなど、多面的、多角的に考えている姿が見取れた。

不自由な授業環境になったことが、逆にこれまで取り入れていなかった授業方法を導入するきっかけとなり、様々な制約の中でも研修を進めることができた。

## オ 成果と課題

### [C・A：評価・改善期]

日常的に行う授業後のフィードバックとは別に、令和2年12月と令和3年1月に本年度の校内研修の評価に関するワークショップ研修を実施し、「子供の課題と教師の願い・手立ての関係図」(図13)を用いて評価と改善について可視化した(図13)。また、2年生以上の子供を対象に3校共通の道徳アンケートを実施し、令和元年度のデータと比較した。



図 11 成果に関するまとめ

図 12 課題に関するまとめ

その結果、成果として「自主的な活動」「主体的な学び」「考え議論する道徳」の3点に関することが改善傾向として捉えられた(図11)。

課題については特に、「挑戦心」「夢や目標をもつ」「諦めない心」の3点に関することが挙げられた(図12)。これらのことから、本校の研修テーマに関わる“日々前に進む”ための主体的な学びや、仲間との自主的な活動面に関しては、一定程度の伸びを確認できたが、夢や目標をもち、向かっていく力については、まだ伸ばし切れていないことが確認できた。

今後も、考え議論する道徳科の授業作りを大切に、子供の変容について情報共有を図りながら、目指す子供の姿に向かって組織的に育てていきたい。



図 13 評価と改善の関係図

## (2) 伊東市立旭小学校

**研究テーマ**                    **思考を働かせる楽しさを味わう子の育成**  
**～課題を自分事としてとらえ、解決に向け、主体的に考える姿を求めて～**

### ア 研究テーマの設定について

門野中学校区の子供が、3校共通のテーマ「夢をはぐくみ 夢に向かって力をつける子」に迫っていくためには、義務教育の開始から6年間を学ぶ小学校が身に付けるべき資質・能力等をきちんと捉え、確実に育成して中学校へ繋ぐことが何より大切だと考えている。

本校では、3校共通のテーマを以下のように捉えている。

- 「夢をはぐくむ」とは…  
未来を想像し、実現すべき目標（願い）を思考し設定すること
- 「夢に向かって力をつける」とは…  
目標に至るために必要な知識・技能等を思考しそれが身に付くよう行動すること

本校の子供たちは、優しさや思いやりをもって人と接し、与えられた課題に真面目に取り組むことができる。一方で、主体的に考え、失敗を恐れずに挑戦する強い思いや行動力には課題がある。

そこで、本校が担うべき役割は、子供たちの思考力を育成することにあると考え、「思考を働かせる楽しさを味わう子の育成」を研究テーマとした。さらに、「課題を自分事としてとらえ、解決に向けて主体的に考える姿を求めて」をサブテーマに設定することで、道徳科の授業を中心にしながらも学校の教育活動全体で思考力の育成を目指すこととした。

### イ 研究の概要

#### (ア) 研究仮説

研究仮説は、研究テーマを、学習指導の過程に即した内容とすることで、より具体的な取組を構想し、全教員が同一歩調で研究を推進し、授業改善を図っているようにした。

#### 【研究仮説】

課題（問い）を自分事としてとらえ、対話と協働を大切にしなが課題解決を図ったり、学びの過程を振り返って次につなげたりする経験を積み重ねることで、子供たちは思考を働かせる楽しさを味わうことになるだろう。

さらに、思考を働かせる楽しさを心ゆくまで味わった子供たちは、将来の夢を実現するために自他を大切にしなが、積極的に行動し続けるようになるだろう。

## (イ) 研究の手立て

研究仮説より、研究テーマの具現化を図るために3つの取組を構想し、実践を進めていくこととした。

### a 【手立て1】 自分事として考えたい・解決したい問いの設定

子供たちが思考を働かせるようになる課題や問いとするためには、子供たちの思考の流れに合致し、自分事として思わず考えたいような課題や問いとなる必要がある。そのためには、以下に示す「3つの観」の明確化を図り、それを指導案やPDCAサイクルシートにまとめた上で、課題や問いの設定を試みる。

- ①価値観・・ねらい（向き合いたい道徳的価値）の明確化
- ②子供観・・本時で扱う道徳的価値での子供の実態と学びの方向性の明確化
- ③教材観・・価値観、子供観を受けて教材をどのように扱って、子供が道徳的価値と向き合うために、この教材をどのように活用するのかを明確化

### b 【手立て2】 多様な考え方・感じ方に出会うための対話

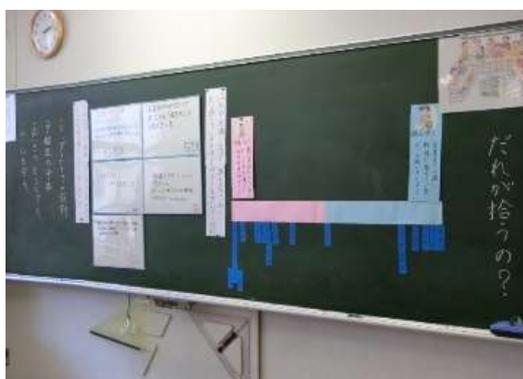
子供たちの思考を深めるためには、対話により、多様な考えや感じ方に出会うことが重要である。そこで、対話を活性化させるために中心発問を吟味したり、対話の根拠となるよう思考を「見える化」したりすることで、子供たちの思考を支える工夫をした。

#### (a) 中心発問を吟味するための視点

- ・「何を指す対話なのか」を明確化する。
- ・「何について対話するのか」を焦点化する。

#### (b) 対話を深める「見える化」の具体例

- ・板書の構造化
- ・ICT機器の積極的活用
- ・思考ツールの活用



板書の構造化



電子黒板の活用

### C 【手立て3】 子供・教師共に有効な振り返り

意欲的に思考するためには、「思考することが分かる楽しさや知る喜びに繋がった」ことを子供自身が実感できることが重要である。そこで、確実に振り返りの時間を確保するとともに振り返りカードを工夫し、子供自身が授業の終末で自分自身と向き合えるようにする。

また、その振り返りが、子供に意欲的な思考を促す授業であったか、子供に喜びや楽しさを与えるものであったかを教師が客観的に評価し、授業改善につながるものであるようにする。

#### (a) 子供たちが積み重ねていく振り返り

- ・ 内容項目の4つの視点ごとに色分けした3校共通のワークシートを使用して、振り返りの時間を確保する。
- ・ 一人一冊、道徳ファイルを持ち、2ヶ年分（低・中・高）を積み重ねる。6年生は門野中学校にファイルを引き継ぎ、子供の思考の連続性が途切れないようにする。
- ・ 同じ内容項目ごとにファイリングし、自分の考えの変容を子供自身が気付くようにする。

#### (b) 教師が積み重ねていく振り返り

- ・ PDCAサイクルシートを活用し、積極的に授業公開をする。
- ・ 授業後は、可能な限り当日に振り返りミーティングを行う。
- ・ 授業後は、「C：成果と課題」「A：振り返りを生かした今後の展望」を記入し、次の授業改善につなげる。

## ウ 研究構想図



## エ 研究実践

### (ア) 【手立て1】に関する実践（令和2年度）

4年生 ■主題名 友達のことを考えて ■教材名 絵はがきと切手  
■内容項目 B（9）友情、信頼

本教材を実践する上では、「3つの観」を以下のように捉えた。

中学年は友達関係が広がる半面、自分の利害にこだわり、トラブルも起こる。互いに理解し合い、信頼し助け合う健全な関係を築かせたい。自分と友達との関わりを見つめ直し、信頼できる友達をつくりたいという思いをもってほしい。

① 価値観

- 困っている友達に優しく声をかけることができる。
- 旭スポーツフェスティバル等の学校行事では相手を思いやり、協力して取り組む様子が見られた。
- 友達関係が壊れることを恐れ、思ったことを発言せずいたり、友達に合わせたりする傾向がある。

② 子供観

③ 教材観

「絵はがきと切手」の教材を使い、料金不足のはがきのことを友達に伝えるべきか否か「自分だったらどうするだろうか。」と問い、思い悩む主人公に共感し、自分の考えや感じ方をはっきりさせようと考えた。そして、「迷っていたひろこ（主人公）がすっきりできたのはどうしてか。」と伝えることを決心し、すっきりした理由を話し合う中で主人公の行動が信頼に基づいたものであったことに気づき、信頼という価値と向き合う時間としたいと構想した。

<本時のねらい>

友だちからもらった絵葉書が料金不足だと知り、不足を言うべきかどうか悩む主人公の気持ちに自分を重ねてその心情を考え、迷っていた主人公がすっきりできた理由について話し合うことを通して、相手はきっとわかってくれるという信頼のもと行動したことに気づき、友達を信頼しようとする心情を育てる。

3つの観を明確にすることで、子供の実態に沿った授業構想となり、何を考えさせたいのかが明確になると共に、子供の考えを多面的・多角的に見取ることにもつながった。教材研究を重ねた中から設定した2つの問い「自分だったらどうするか。」「迷っていたひろこがすっきりしたのはどうしてか。」は、子供たちにとって自分事として考えたい問いとなった。問いを解決しようと思いを働かせた子供たちは、自分の考えを友達に伝えて確かめたい、話し合いたいという思いをもち、対話をする必然性が生まれた。

### (イ) 【手立て2】に関する実践（令和元年度）

6年生 ■主題名 チームの一員として ■教材名 星野君の二塁打  
■内容項目 C（16）よりよい学校生活、集団生活の充実

ただ単に、監督の指示に従わなかった星野君が良くない、きまりは守るべきだ、ということに終始せずに、監督が下した判断の意味を考えたり、「星野君の行動はチームのためになったのか」について話し合ったりすることで、きまりを守って自他共に幸せになるために、自分の役割を果たすとはどういうことなのか、深く思考する姿を目指したいと考えた。



根拠を基に考えを伝える

対話から多様な考え方や感じ方に出会い、思考の深まりをねらうため、以下のように、一人でじっくりと考え、グループから全体へと対話を広げる授業展開とした。

一人で	ワークシート中にハートメーターを示し、自分の気持ちがどの当たりにあるのかを「見える化」し、自分の考えをもちやすいようにした。
グループで	ホワイトボードにネームプレートで自分の立場を示した後、理由を書き込みながら話し合った。根拠をもって考えを交流し合うことで対話の活性化につながった。
全体で	根拠を観点別に板書したり、ネームプレートを用いたりすることで、同じ判断の中でも根拠に違いがあることに気づいた。自分とは違う考え方・感じ方に出会い、認めることができた。

## (ウ) 【手立て3】に関する実践（令和元年度・令和2年度）

### a 子供たちが積み重ねていく振り返り

毎時間の授業の振り返りを同じ形式（3校共通のワークシート）で積み上げていくことで、戸惑わずに、自分の生活に関わらせながら振り返りをすることができるようになってきた。また、自分との関わりで振り返ることができるようになると、日々の小さな出来事の中から自分のよさに目が向くようになった。



低学年では、振り返りの意味を理解し、自分との関わりで考えにくい子供もいるので、話し合いで出たキーワードを黒板に短冊などに書いて残し、それを基に振り返りをすることで、思考が途切れずに道徳的価値に迫れるように工夫した。

### b 教師が積み重ねていく振り返り

授業実践後は、参観者が「PDCA振り返りミーティング」を行い、客観的視点から自分自身の授業の成果や課題について振り返ることができるようにした。そこで得た助言と自己の振り返り、さらには、子供たちの振り返りから、

PDCAサイクルシートの「C：成果と課題」「D：振り返りを生かした今後の展望」を授業者が記入し、次の授業改善につなげるようにした。

完成したPDCAサイクルシートは全教員で共有し、個人の実践で得られた成果と課題が学校全体の積み重ねとなるようにした。

## オ 成果と課題

研究の成果と課題は以下のとおりであった。

### (ア) 子供アンケートの結果から（6年生の集計結果を一部抜粋）

a 将来の夢や希望をもっている。A：当てはまる B：どちらかと言えば当てはまる				
学年	5年時（R元年9月）	6年時（R2年6月）	6年時（R2年1月）	A+B
回答結果	A73% B7%	A66% B25%	A66% B33%	➡
b 自分を大切にしている。				
学年	5年時（R元年9月）	6年時（R2年6月）	6年時（R2年1月）	A+B
回答結果	A53% B42%	A59% B29%	A59% B37%	➡
c 人が困っているときは、進んで助けている。				
学年	5年時（R元年9月）	6年時（R2年6月）	6年時（R2年1月）	A+B
回答結果	A61% B30%	A45% B55%	A29% B66%	➡
d 自分の考えを積極的に表現している。				
学年	5年時（R元年9月）	6年時（R2年6月）	6年時（R2年1月）	A+B
回答結果	A17% B58%	A25% B48%	A29% B62%	➡

【考察】 一定の心の成長が見られたことから、多くの子供が思考を働かせる楽しさを味わえたと推察できる。しかし、「他者に対する思いやり」については、自分と周囲との関わりにも注視し、今後も研究を進めていきたい。

### (イ) 学校評価、校内授業事後研修会、振り返りミーティングから

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none"> <li>○自分の考えや生活経験を根拠に考え、発言できるようになってきた。</li> <li>○板書は有効な思考ツールであり、板書の構造化は学びの深まりに寄与する。</li> <li>○授業改善が進むに連れ、子供と教師の信頼関係が築けるようになった。</li> <li>○教師が3観（価値観・子供観・教材観）を明確にした上で、中心発問を考えるようになったことで、授業の質が高まってきた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●コロナ禍で、十分な実践を積み重ねることができなかった。</li> <li>●子供たちの意識がワークシートにばかりいってしまうと、対話ではなく、読むだけの形式的な話し合いになってしまう。</li> <li>●教師の道徳的価値に関わる子供の実態の見取りの甘さから、どの子にも思考の楽しさを十分実感させるまでには至っていない。</li> </ul>

新型コロナウイルス感染症の世界的な流行もあり、先行き不透明で将来への不安が募る状況となっているが、だからこそ道徳教育が果たす役割は大きいと感じている。

本校で種をまき、大切に育てた芽が、やがて門野中学校で実を結び、人生をよりよく生きるための基盤となることを願い、今後も研究を推進していきたい。

### (3) 伊東市立門野中学校

**研究テーマ** 夢をはぐくみ 夢に向かって力をつける子の育成  
～多面的・多角的に考え、友達と共に未来を見つめる～

#### ア 研究テーマの設定について

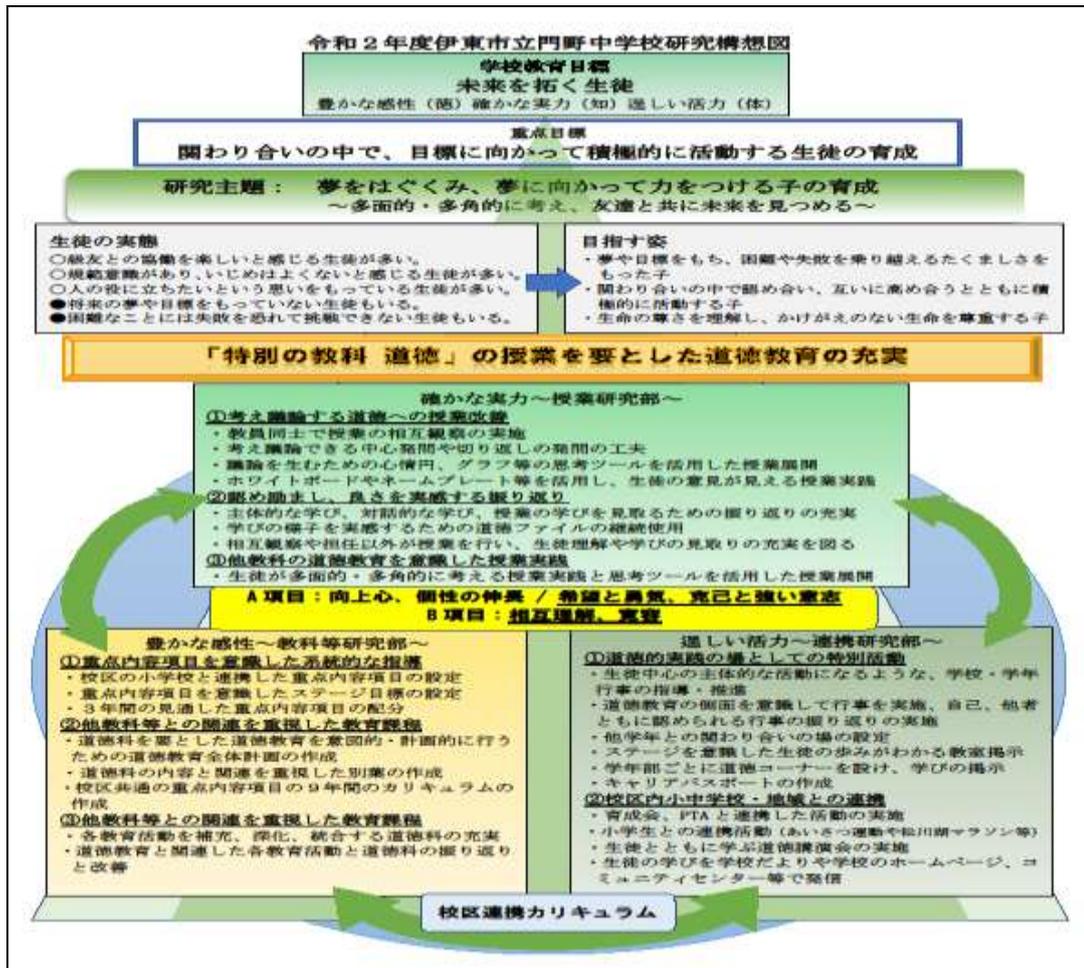
本校の学校教育目標「未来を拓く生徒」とは、様々な困難に負けず、夢や理想の実現に向けたたくましく生きる力を持った生徒である。多様な価値観が混在するであろう未来でも、限られた価値観の中で独善的にならず、他者との交流の中で多様な考えの中から自分にとっての最適解を求め、力強く自己実現を図るための素地を養うことが、校区共通の目指す子供像の具現化につながると考え、上記研究テーマを設定した。

#### イ 研究の概要

##### (ア) 研究仮説

学校行事や地域との連携を意識し、生徒が自分の経験や考えを振り返りながら主体的に授業に取り組む工夫を行うことによって、他者と関わり合いながら、ものごとを多面的・多角的に考え、他者の良さや自身の成長を実感しながら、より良く生きようとする生徒が育つだろう。

##### (イ) 研究構想図



## ウ 研究実践

### (ア) 研究組織

校区の研究組織と校内の分掌を連携させ、以下のような組織を構成した。

研究部	主な研究内容
豊かな感性 (教科等研究部)	・ 重点内容項目との関連を重視した教育課程の研究 ・ 連携カリキュラムの実践に関する研究
確かな学力 (授業研究部)	・ 「考え議論する道徳」への授業改善 ・ 認め励まし良さを実感する評価に関する研究
逞しい活力 (連携研究部)	・ 道徳的実践の場としての特別活動の実践 ・ 校区小学校や地域との連携の研究

### (イ) 研究の内容

#### a 豊かな感性 (教科等研究部) 重点内容項目の設定とステージ制の活用

##### (a) 独自の重点内容項目の追加

生徒が自らの夢を実現するために、中学校卒業後の進路決定は大きな意味を持つ。学年が上がるにつれ、失敗を恐れ、挑戦できないという実態を受け、中学校卒業までに、自分の夢や目標をもち、失敗を恐れず挑戦する気持ちを育むことが重要であると考え、「向上心、個性の伸長」を学校独自の重点内容項目として追加した。

##### (b) ステージ制を有効に活用する指導計画の作成

教育活動全体を通して目指す生徒像の具現化が図れるよう、従来のステージ制の見直しを行った。ステージ目標や核となる教育活動と、重点内容項目との関連を明らかにし、各教科の指導計画の見直しを行った。

群馬県伊豆市立門野中学校 特別の教科 道徳(第1学年)

3校共通の重点項目	A(4) 希望と夢、自立と強い意志 (個性の伸長)	学校、学年の重点項目	A(3) 向上心、個性の伸長						
4月	5月	6月	7月	8月	10月	11月	12月	1月	2月
「仲間同士、お互いを尊重し合って、新しい目標を一緒に目指そう」	「仲間と競い合い、励まし合いながら、自分自身を成長させていこう」	「先達・後進のよきよき関係を築き、新しい自分を目指そう」							
ステージ	A 希望と夢、自立と強い意志 B 相互理解、寛容	目標を重点内容項目と関連づけ	A 希望と夢、自立と強い意志 向上心、個性の伸長	A 希望と夢、自立と強い意志 向上心、個性の伸長					
道徳	道徳力(1) 自己理解と自己肯定感の確立 道徳力(2) 他者理解と相互理解の確立 道徳力(3) 社会規範の理解と実践 道徳力(4) 道徳的実践力の育成	独自の重点内容項目の追加 学年順に比重が高くなるように設定	ステージ目標の見直し、年間で全ての重点内容項目を網羅						
学習活動	学習活動(1) 道徳的実践力の育成 学習活動(2) 道徳的実践力の育成 学習活動(3) 道徳的実践力の育成 学習活動(4) 道徳的実践力の育成	ステージを位置づけ							

ステージ制を活用した別業 (例：門野中1年生)

## b 確かな学力（授業研究部） 考え議論する道徳に向けての授業

教科書を読み、教材の内容の理解を促しながら教員が一方的に進める授業から、「考え、議論する道徳」への授業改善を目指した。

### (a) 観点を明確にし、3つの発問を柱とした授業づくり

授業において生徒の多様な考えを引き出し、議論を通して道徳的価値への理解を深めたり、道徳的実践意欲を高めたりするためには教材研究が不可欠である。確かな指導観を持って授業に臨むために、校区の研究の手立てをもとに教材研究の観点として以下の3点を設定した。教材研究の視点を明確にし、指導案上にも位置づけたことで、授業構想や発問に関する検討の充実が図られた。

観 点	授業研究のポイント
価値観	学習指導要領に定められている、授業で扱う道徳的価値を確認する
生徒観	扱う道徳的価値に関する生徒の実態を基に、予想される表れを予測する
教材観	授業のねらい、生徒の実態に合った教材の価値や活用の仕方を検討する

また生徒が自分ごととして、多面的・多角的に考える授業を行うために、発問を重視した。発問を以下の3つに分類し、吟味を重ねた。

基本発問	授業で初めて道徳的価値に触れる発問
中心発問	多様な考えに触れ、道徳的価値に迫る発問
振り返り発問	終末部に、道徳的価値を自分事として再度考えるための発問



学年研修の日常化

### (b) 生徒の思考を促す手立ての工夫

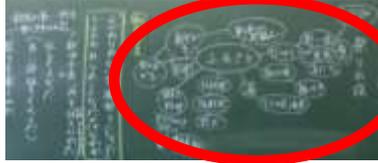
生徒が自分の考えを明確にしたり、自分とは異なる他者の考えに触れながら考えを深めたりするために、授業に合った思考ツールについて研究を重ねた。思考ツールの使用が目的化しないように気をつけ、思考ツールを活用することで自分の考えが明確になったり、言語化が難しい感情を表現できたりするようにした。意見を交流する形態についても、意見を順番に話して終わったり、一部の生徒の発言に終始したりすることがないように、学級全体・小集団・ペアなど、目的に合った形態となるよう吟味した。論点を明確にし、互いの相違などが確認できるようなツールを活用することで、生徒の議論が活発になり、思考の広がりや深まりが見られた。

また生徒が授業の終末部で1時間の授業を振り返る際の重要な思考ツールとして、板書を重視した。生徒の思考が視覚化される板書を目指し、授業実践後に検討を重ねた。



授業の振り返りができる板書を目指して

【門野中学校で主に活用した思考ツールの一例】

思考ツール	方法と効果
 <p>ホワイトボードの活用</p>	<p>ただ意見をまとめるために使うのではなく、それぞれの意見を整理したり、様々な立場の意見を明確にしたりするために用いる。授業では、最後の意見発表に用いるのではなく、ホワイトボードをきっかけに再度思考を働かせることをねらい、中心発問で活用することが効果的であった。</p>
 <p>心情メーターの活用</p>	<p>ネームプレートと共に活用し、生徒一人一人が自分の意見を明確にするために用いる。生徒の意見を分類しながら個々の考えを確認し、同じ立場でも考え方が違うことを視覚化することで、生徒は多面的・多角的に考えることができた。登場人物の言動を自分に置きかえたり、考えの変化を表現したりする手段として効果的であった。</p>
 <p>マインドマッピングの活用</p>	<p>生徒の意見を分類したり、つながりを確認したりしながら板書することにより、生徒自身が多様な考え方を視野に入れながら自分の意見を整理することができる。登場人物の心情を多様な観点から整理したりすることができるため、基本発問や補助発問で用いることが効果的であった。</p>

(c) 校内研修の充実

学校全体の授業力の向上につなげるために、板書の記録や授業の相互観察を行った。特に相互観察では、学年部ごとに授業を練り合う時間を設け、「こういう発問に変えたらどうか。」「この思考ツールの方が生徒の考えが整理しやすいのではないか。」と日常的に授業改善が図られた。

【相互観察・学年団の授業研修 ①】リレー式授業研究	
	<p>同じ教材を用いた授業を相互参観し、学年部内で改善を図りながら、順次実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ ・生徒の反応を見ながら授業展開の改善を図りやすい。</li> <li>○ ・参観・実践をくり返し、教員の指導技術の向上につながる。</li> <li>▲ ・学級により生徒の実態が異なるため、実際に改善を図って授業を行ってもうまくマッチしないことが見られる。</li> </ul>
【相互観察・学年団の授業研修 ②】エキスパート式授業研究	
	<p>各教員が担当する教材を決め、担任学級以外でも授業を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ ・教師個々の個性や経験にあった教材を担当することにより、授業の質の向上が図られる。また学年団の生徒理解が深まる。</li> <li>○ ・学年内でエキスパート方式を分担することにより、授業準備等の業務が軽減される。</li> <li>▲ ・担任ではない教員が授業を行うため、生徒の表れの予測が難しく、生徒も本音が言いにくい状況が生じやすい。</li> </ul>

## C たくましい活力（連携研究部）道徳的実践の場 自他の良さを実感する場

道徳の授業で養った道徳性の実践の場として、また自分や学級の成長を実感する場として、特別活動及び地域・家庭との連携の充実に取り組んだ。

### (a) 自治的な活動を重視した学校行事と振り返りの充実

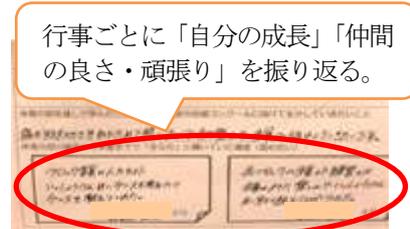
コロナ禍の中でも思い出に残る行事を創りたいという想いの実現のために、これまでの活動に工夫を加えて実施した。また、実施後の振り返りカードを重点内容項目に合わせて作成し、自他の成長を振り返る機会を確保した。



感染症対策を実施した体育の部



かどの球場での文化の部



行事ごとに「自分の成長」「仲間の良さ・頑張り」を振り返る。

行事の振り返りカード

### (b) 校内掲示や学校ホームページの充実

自他の成長や集団の向上を日常的に振り返り、良さを認め合う機会を増やすために、校内掲示の充実に取り組んだ。また、重点内容項目を意識した活動を掲示物にまとめ、全校生徒が集団の成長を実感できる環境を創るとともに、重点内容項目に関する道徳科の授業の内容を道徳コーナーに掲示した。

令和元年度に実施した親子講演会を契機に、学年委員会による温かい言葉がけに関する掲示の充実を図るとともに、活動の様子や生徒の声を学校だよりや学校ホームページに掲載し、地域や保護者にも生徒の良さを積極的に広報した。



ステージ目標に合わせた掲示



ペップの木

令和元年度に実施した親子講演会「ペップトーク 仲間を励ます言葉がけ」をきっかけに、友達の良さを見つけ、掲示する活動を行った。



各学年の道徳コーナー

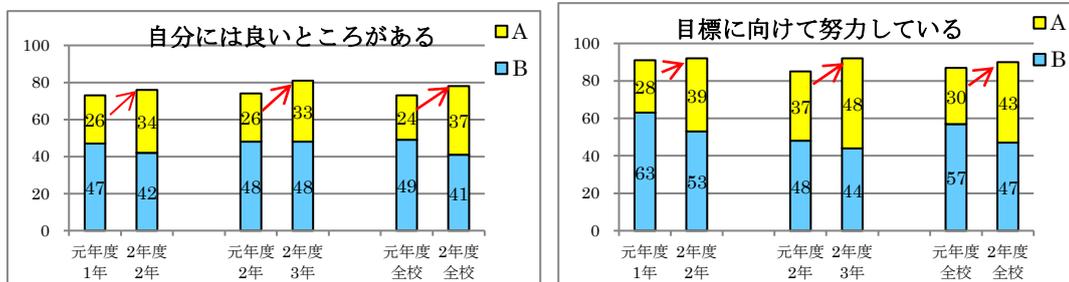


日常的に道徳科の授業で学習したことを振り返ることができるように、重点内容項目を中心に、授業で活用した資料、板書の写真、生徒の意見や感想などをまとめ、各学年フロアに掲示した。

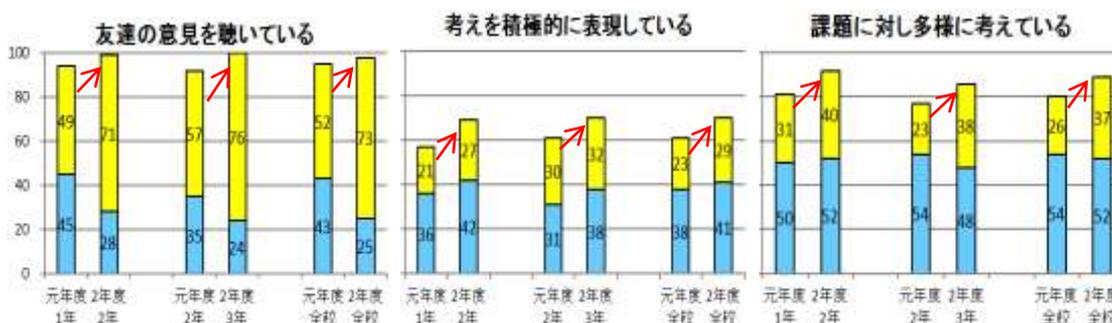
## エ 成果と課題

以下は、令和元年と令和2年の12月にそれぞれ実施した生徒アンケートの結果、回答をA・Bとした生徒の割合を示したものである。

(A とてもあてはまる B あてはまる C ややあてはまる D あてはまらない 単位は%)



研究を推進したことにより、自己肯定感の向上が見られた。更に、目標に向けて努力していることを実感している生徒の増加は、研究テーマに掲げた「未来を見つめる生徒」の育成が、実を結びつつある。



「考え、議論する道徳授業」の実践研究を通し、生徒の姿に明らかな変容が見られたことを実感する。一方的に自分の意見を述べ、意見を交換するだけにとどまっていた授業が多かったが、他者の意見を取り入れたり、自分の考えを再構築したりする姿が多く見られるようになった。「相手の意見をしっかりと聴く」ことが定着し、学びの深まりを実感している生徒が増加した。

(道徳の授業に関する生徒の振り返りより)

- ・班の人と意見交換をして、「そういう考えもあるのか!」と驚くことがある。
- ・教材を自分の日常に置き換えて考える授業が楽しい。
- ・自分を見つめ直し、日常生活に生かせることが多い。



相手の意見を聴くことが当たり前になった生徒は、多様な意見に触れ、自ずと多面的・多角的に物事を捉えられるようになった。それは道徳科の授業に限らず、他教科でも同じような様子が見られようになったと実感している教員も多い。

しかしながら、自分の良さを見出せず、思いを積極的に表現することに抵抗を感じる生徒も未だ少なくない。来年度から全面実施される新学習指導要領の下での授業においても、道徳教育で培った成果を生かし、生徒一人一人が自分の良さを実感し、夢に向かって挑戦することを楽しむたくましさを身に付けることができるよう、研究の充実を図っていきたい。

## 5 終わりに

### (1) 成果

令和元年度末からの新型コロナウイルス感染症拡大により、大幅な変更を余儀なくされた研究であったが、研究初年度に確認した「校区小中学校・地域が連携して育てる門野の子」の具現化を目指し、3校の連携を図りながら、各校で工夫を重ねた実践を行い、以下のような成果が見られた

#### ア 生命の尊さを理解し、かけがえのない生命を尊重する子

「自己肯定感の高さに学年学年間の差がある」ことを共通の課題として研究に取り組んだ結果、門野中学校でのアンケートの結果に以下のような向上が見られた。

##### 【自分には良いところがある】

A とてもあてはまる B あてはまる C あまりあてはまらない D あてはまらない

	A	B	A+B
令和元年度 全校	24%	37%	61%
令和2年度 全校	37%	41%	78%
変容	13%増	4%増	17%増

	A	B	A+B
令和元年度 1年生	26%	47%	73%
令和2年度 1年生	41%	33%	74%
変容	15%増	14%減	1%増

思春期を迎える中学生は、他者との比較を通して自信を無くしたり、よさを見出せなかったりすることが多いが、自分に対して肯定的な見方をする子供が大幅に増加した。また小中接続期である中学1年生の結果は、A・Bの合計に見られる自分に対する肯定的な見方をする子供の割合はほぼ変化が見られなかったが、「A とてもあてはまる」と回答した子供の割合が大幅に増加した。新型コロナウイルス感染症の拡大により、入学後の2か月が臨時休業となり、大きな不安を抱えての中学校生活の始まりであったことが予測されるが、小学校において「夢をはぐくむとはどういうことか」「夢に向かって力をつけるとはどういうことか」を明確にし、全ての教育活動を通して子供が自分のよさを実感できる機会を大切にし、振り返りや教師の価値づけを丁寧に行いながら、子供たちの自尊感情を育ててきたことの成果が表れてきていると考えられる。

また、新型コロナウイルス感染症の拡大により、様々な制約を設けての学校生活を強いられた1年間であったが、各校とも感染予防を徹底し、工夫しながら前向きに毎日を過ごす様子が見られた。「新しい生活様式」の中、かけがえのない生命を大切にしながら、自分の良さを実感するような教育活動を工夫して実践していくことが求められている。



## イ 関わり合いの中で認め合い、互いに高め合うとともに積極的に活動する子

「多面的・多角的に考え、友達と共に未来を見つめる」を研究のサブテーマに設定し、友達との関わり合いを重視した教育活動を推進した結果、各校の研究の成果が見られた。

学校名	子どもの変容
大池小学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 道徳科の授業で考えを深め、話し合うことができている。</li> <li>・ 総合的な学習の時間での主体的な学びが充実してきた。</li> </ul>
旭小学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分の考えを積極的に表現している子供が増えた。</li> <li>・ 自分の考えや生活経験を根拠に発言できるようになってきた。</li> </ul>
門野中学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ほぼ100%の子供が友達の意見をしっかり聴いている。</li> <li>・ 課題に対し、多様に考えていることを実感する子供が増えた。</li> </ul>

子供たちが主体的に話し合うためには、切実な課題と何でも安心して語り合える人間関係が不可欠である。道徳の授業研究の視点として「価値観」、「子供観」、「教材観」の『3つの観』を設定したが、確かな子ども理解に基づく授業構想力の向上の手立てとして、道徳科以外の教育活動や授業の改善にも成果が上がっていることがうかがえる。



また、子供たちが、一つの物事にもいろいろな考え方や感じ方があることを実感する道徳科の授業づくりの研究を継続したことで、友達の意見の細かい部分までしっかり聴こうとする意識及び聴き取る能力、また、自分の考えをよりわかりやすく表現しようとする意識と能力に向上の兆しが見られている。

子供たちが互いに協力し合ったり、高め合ったりすることの良さを実感するために、学校や地域での行事の重要性は言うまでもない。新型コロナウイルス感染症拡大により様々な制約の下で大きな変容を余儀なくされたが、各校の道徳教育全体計画を見直しながら、新しい生活様式に対応した学校行事などが実践された。緊急事態の中でも互いに声を掛け合いながらたくましく活動し、充実感を得た子供が多かった。



各校の学校行事のようす（左から リレー大会（大池小）・修学旅行（旭小）・体育祭（門野中））

## ウ 夢や目標をもち、困難や失敗を乗り越えるたくましさをもった子

校区の子供の実態をもとに、「希望と勇気」「努力と強い意志（小）」「克己と強い意志（中）」を根幹となる重点内容項目に設定し、教育活動を推進してきた。「夢」という抽象的な言葉に、3校の子供への願いを込めた研究であったが、各校の研究において以下のような成果が見られた。

(大池小学校) 令和2年度児童アンケート（5年生・4年生・3年生）

「物事を最後までやり遂げてうれしかったことがある。」

対 象	5 年 生	4 年 生	3 年 生
結 果	95.5% (前年度比+4.6%)	94.1% (前年度比+12.4%)	97.0% (前年度比+5.6%)
変 容	3学年で物事をやり遂げた実感をもつ子供が増加		

(旭小学校) 令和2年度6年生児童アンケート「将来の夢や希望をもっている」

時 期	5 年 生 9 月	6 年 生 6 月	6 年 生 1 月
結 果	A 73% B 7%	A 66% B 25%	A 66% B 33%
変 容	将来の夢や希望をもっていると回答した子供が99%（19%増）		

(門野中学校) 令和2年度全校生徒アンケート「目標に向けて努力している」

時 期	令和元年度 1 2 月	令和2年度 1 2 月
結 果	A 30% B 57%	A 43% B 47%
変 容	目標に向けて努力していると回答した子供が13%増	

新型コロナウイルス感染症の拡大により、学校間の交流や研究実践も十分にできない状況の中での研究となったが、3校連携カリキュラムの趣旨を生かした教育活動を推進することができた。今後も「校区の子どもを9年間かけて育てる」という理念の下、願う子供の姿を共有し、学校間及び地域との連携を図りながら境域活動の充実を推進していくことが重要である。

## (2) 課題

ア「特別の教科 道徳」の授業研究を継続してきたが、教師の道徳的価値に関する子供の実態の理解が十分でなく、どの子供も思考の楽しさを十分に実感できる授業には至っていない。今後も「価値観」「子供観」「教材観」の3つの観点から教材研究を深め、授業の質の向上を図る必要がある。

イ コロナ禍の中、作成した連携カリキュラムを確実に実践・検証することができていない。新型コロナの収束状況や子どもの実態を見ながら、新しい生活様式に見合う実施方法を検討しながら、研究を継続する必要がある。

ウ 校区3校の連携により子供たちの自己肯定感の向上が見られているが、不登校の発生率は依然として高い。今後も子供たち一人一人に関する理解を深め、どの子供も安心して充実した学校生活を送れるよう、連携を深めながら各校の教育活動の充実を図る必要がある。

**○伊東市立大池小学校**

〒414-0051

伊東市吉田824番地の4

TEL 0557-45-0076

FAX 0557-45-4579

E-mail i-ooike@estate.ocn.ne.jp

**○伊東市立旭小学校**

〒414-0055

伊東市岡1270番地の1

TEL 0557-36-4000

FAX 0557-36-4001

E-mail i-asahi@hyper.ocn.ne.jp

**○伊東市立門野中学校**

〒414-0054

伊東市鎌田1281番地の63

TEL 0557-37-7746

FAX 0557-37-8843

E-mail kadonoh@carrot.ocn.ne.jp